

いっぽいっぽ



R 3・1・15 No.9
天草市立有明小学校
特別支援教育コーディネーター
山本美紀



本年も どうぞよろしくお願いします

今年は、いつもと違う幕明けになりましたが、子どもたちは元気に登校してくれています。子どもたちが学校にいてくれると私たちは張り切り方が違います。やっぱり、子どもって宝です。

熊日新聞 1月6日、8日版に【大人の発達障害】の現状が掲載されていました。大人になって発達障害を発症することはまずありませんが、社会に出たことで特性が顕在化することはあります。その理由を考えてみました。

- ① 自分自身が発達障害の特性に気づいていない。
この場合、うまくいかないのは自分のせいと自分を責めてしまいがちです。
- ② 自分自身が診断を受けて自己理解しているが、職場に話せず対応策を自分自身が探せていない。
どんな仕事が自分に向いているか、どう対応してもらえば仕事を続けられるのかを自分で分析して、職場に理解してもらうことで仕事がしやすくなります。
- ③ すべて話しているけど対策を受け入れてもらえない。
2005年4月に発達障害者支援法が施行され、障害の特性やライフステージに応じた支援を国や地方自治体、国民の責務と定めています。しかし、残念ながら、社会にまだ完全に浸透しているといえないのも事実です。当事者が働きかけていくことで改善されていくはずですが。

学校現場も発達障害者支援法を受けて、「特別支援教育（特別な支援を必要とする子どもへの対応）」が導入されたのです。ですから、「うちの子は変わっているのでは？」と悩むのではなく、「うちの子は、こんなところが少しみんなと違うと思います。特別な支援を受けた方がいいのでしょうか？」と担任に相談してみてください。また、3学期ですから来年度を見越して担任から話をする場合もあります。保護者はもちろん、その子どもが自分の特徴を知ること、で、「こんな時はこうした方がよかったな。」と自分に合う対処法を学びます。幼い頃にノウハウを学んでおけば、大人になってからも自分で対策を講じることができます。特別支援教育は大人になっても順応できるための手立てなのです。

右に発達障がいの特徴例を示します。特別支援学級の子どもたちが該当するとは限りません。そのことをご承知くださって特性を理解してください。大切なのは、障がいをマイナスと捉えるのではなく、その人の個性とらえて、あるがままの姿を受け入れ、支援の手を差し伸べることで、子どもたちが自分なりの対処法を身につけていくことだと思います。

支援が必要な人の特徴

言葉の発達の遅れ

コミュニケーションの障害
対人関係、社会性の障害
パターン化した行動
こだわり

言葉の発達の遅れなし
興味・関心の偏り
不器用

読み・書き
計算するのどれかが
極端に苦手

集中できない
じっとするのが苦手
よく考えずに行動する

Cさんの例

会議で大事なことを忘れまいとメモをとるが、本当は書くことが苦手なので、書くことに必死になりすぎて、会議の内容がわからなくなることもある。後で会議の内容を周りの人に聞くので周りの人から「もっと要領よくメモをとればいいのに。」と言われてしまう。でも、苦手なことを少しでも楽にできるように、ボイスレコーダーを使いこなす等、他の方法を取り入れる工夫をすることができる。

Dさんの例

大事な仕事の予定を書き忘れたり、大切な書類を置き忘れたりすることがよくある。周りの人にはあきれるくらい「何回言っても忘れてしまう人」と言われてしまう。でも、気配り名人で、困っている人がいれば誰よりも早く気づいて手助けすることができる。

Aさんの例

急に予定が変わったり、初めての場所に行ったりすると不安になり動けなくなることがある。そんな時、周りの人が促すと余計不安が高まり突然大きな声を出してしまうことがある。周りの人から、「どうしてそんなに不安になるのかわからないので、何をしてあげたらよいのかわからない。」と言われてしまう。でも、よく知っている場所では一生懸命、活動に取り組むことができる。

Bさんの例

他の人と話している時に自分のことばかり話してしまったり、相手の人にははっきりと「もう終わりにしてください。」と言われないと、止まらないことがよくある。周りの人から、「相手の気持ちがわからない。自分勝手にわがままな子」と言われてしまう。でも、大好きな電車のことになると、専門知識の知識をもって、お友達に感心される。

ここに示したのは、あくまでも一例であって、どんな能力に障がいがあるか、どの程度なのかは人によって様々です。子どもにも大人にもこれらの特徴をもつ発達障がい者は、障がいの困難さが目立ちますが、優れた能力が発揮されている場合もあり、周りから見てもアンバランスな様子が見えにくい障がい者です。そのため、上で紹介したような印象をもたれていることが多くあります。近年の調査では、発達障害の特徴をもつ人は、希な存在ではなく、身近にいることがわかってきました。発達障がいの原因はまだよくわかっていませんが、現在では脳機能の障がいと考えられていて、小さい頃からその症状が現れています。早い時期から周囲の理解が得られ、能力を伸ばすための療育などの必要な支援や環境の調整が行われることが大切です。

以上は、厚生労働省からのパンフレットからの抜粋です。手だては小さい頃ほど効果があります。いろいろな人が社会にはいるけれど、工夫によって社会生活では、ほとんど困らないようにできるのです。そのための方法を考え、実行していくのが特別支援教育の目的なのです。

